

## ヴェネチアとフィレンツェの文化

倉 田 稔

### ヴェネチアで

2013年9月に、イタリアのミラノを経ち、三泊四日でヴェネチアを訪れた。

ヴェネチアはヴェネト州にあり、この州には、ヴェローナ、ヴィチエンツァ、パドワという有名な都市もある。

10日夕、ユーロスター（特急列車名）で、ヴェネチア・サンタルチア駅に着いた。ここが終点で、一つ前にヴェネチア・メストレ駅がある。だから間違ったら大変である。ここまで車掌が全く来なかった。鉄道は一八四六年に敷かれたので、ハプスブルク時代である。メストレに工業地帯がある。よく知られているヴェネチアとは、大きな島である。鉄道以外に、自由橋という自動車道路もあって、本土とヴェネチアを結んでいる。

駅を降りると駅前がすぐ「スペイン広場」であった。駅から徒歩5分で予約していたホテル・アップツィアについた。4つ星で、元修道院であった。

ヴェネチアは452年に歴史が始まった。ここは島である。6つの町（セスティエーレ）からなる。117の小島が378の橋でつながっている。

夕食は、ホテルで教わった、おいしいというレストランPovoledoへ行った。ここでは運河添いの席へ案内された、私は赤ワインとスパゲッティ・ミートソース。ワイフは、蟹入りスパゲッティで、蟹を細かく切るための鋏がついてくる。だが日本の物と違って使いにくい。あとから、ここは海産物の得意な店だったと知った。目の前をヴァポレットと呼ばれる水上乗り合い船が行き来している。この店は観光客とイタリア人で賑わっていて、日本人もいた。

11日 島自体が世界遺産なので、旧市内では法律により自動車が入れない。そこで必然的に皆、徒歩である。道路はとても狭く、入り組んでいる。

ペット・ボトルの水を買おうとして、ある店に入ったら、パイナップル・ジュースの缶があったので、一缶100円くらいで買ったが、それはとてもおいしいことが分かった。

ヴァポレット（乗り合い船、水上バス）でサン・マルコ広場へ行く。この広場だけがピアツァと呼ばれる。

ヴェネチア市の中央を逆S字型の大運河（カナル・グランデ）が流れ、約4kmの長さで、幅は、30-70mである。そこをヴァポレットが往復している。大運河の両側に、14-18世紀のゴシックヤルネサンスの宮殿や貴族の、色とりどりの邸宅が立ち並ぶ。カ・ドーロ（＝黄金宮）が有名である。運河は幅の広いのはカナル、狭いのはリオと言われるそうだ。（塩野、1,p.52）そこをゴンドラが行き来する。時々、水上タクシー（モーターボート）が走る。

大運河には橋は3つあり、そのうちリアルト橋は最も古い。大運河の中央にあり、1952年に作られた白い大理石の橋で、イストリアの石材を使った。もう1つは、駅前のスカルツィ橋で、新しいものである。そしてアカデミア橋もある。

ただし我々は、初めて乗ったときは、違う行き方の船に知らずに乗った。ジュデッカ運河を廻るルートであった。ここは、ヴェネチア本島と、その南にあるかなり大きな島であるジュデッカ島の間を流れる運河である。

サン・マルコ広場には、サンマルコ寺院（ビザンチン様式）とドージェ館（ルネサンス様式）があり、双方とも有名である。

まずドージェ館、つまりドゥカーレ宮殿を見学して、その大規模さに驚いた。館内の部屋の天井は高く、壁や柱が豪華である。有名な画家が壁や天井に絵を描き、梁は非常に太い材木でできている。ヴェネチアは大変な富を得ていたのだ。大評議の間にも驚かされる。ヴェネチア共和国時代に政治的協議のために全ヴェネチア有権者がこの三階の大評議の間に集まったのだ。

この館の裏手に監獄もある。ここから二階から渡り廊下＝橋でつながっており、これは「ためいきの橋」と言う。裁判で有罪となり人がこの渡り廊下から獄に入るとき、ため息をつくからである。

この宮殿を見終わり、サン・マルコ広場の高級カフェに入り、店内で、昼食代わりの食事をする。パリでもイタリアでも、店内と屋外でテーブルがあり、店内で飲食すると割高になる。我々は、少し寒いので、屋外は避けた。ワイフはサンドイッチ、つまりフォカッチャだ。フォカッチャはイタリアの厚みがあるパンである。私はコーヒー。このカフェではバングラデシュの若者がウェイターだった。他は中国人女性で、全員が外国人である。

広場を出て、ガラス店をみて、ちょっと買い物をした。綺麗な小さな店が続く。ムラノ・ガラス店が多い。私は、本物そっくりに型取ったさくらんぼガラス、ワイフはヴェネチアの風景を印刷してある小さなグラス、髪留めなど買う。

途中、ゴンドラ乗り場があったが、乗らなかった。料金制度が分からないのだ。ただしゴンドラをどうやって岸に着けるかなどは、よく見ていたので、分かった。観光客が喜んで乗っている。

黒人が鞆や袋を街路で売っている。主に旅行用の鞆である。彼らはしょっちゅう移動して売っている。観光旅行の町なので売れるのだろうか。

夕食を案内図にあったレストランでとる。予約していないと言うと、屋外のテント屋根の下の席に案内された。私はワインとポークを注文したが、この肉が柔らかくて、おいしい、それにココナッツ・ソースがかかっていた。ワイフは、緑色の生パスタをとった。

食後、ヴァポレットで帰る。ヴァポレットは1時間の券をいつも買っていた。もっとも1時間も乗るようなことはなく、大体長くて駅からサンマルコ広場までだから四〇分である。料金は一人片道7ユーロ（約1000円）なので、高い感じがした。

12日 ヴァポレットで再びサンマルコ広場へ行く。サンマルコ広場に大鐘楼（＝カンパニレ）があり、95mの高さだ。ここからはとても展望がよいらしい。灯台の役目もした。だがあまり参観者が多いのでやめて、サンマルコ寺院を見学した。

ここは、かつてヴェネチア商人がアレクサンドリアの教会でマルコの遺骸を入手して、それを安置するために作られた。寺院に入ってすぐ右側の宝物部を見た。寺院は9世紀に建てられ、11世紀に現在の形になった。ビザンチン風を加味したルネサンス風である。浅緑色の5つのドームがある。内部は大天井から壁、床まで、モザイク画である。中には「天地創造」「アダムの墮落」「予言者ヨハネ」がある。

イタリアの他の町もそうだが、ヴェネチアにも乞食がいる。寺院を出るとき、出口の側に、老女が、汚れた厚着で、土下座をしている形で、缶を置いて座っていた。私は写真を撮ったので小銭を入れた。

高級カフェに入った。この広場で、「古い有名なカフェに入るとよい」と言われていたので、古い豪華そうなカフェを探し、ここで昼食代わりとした。そこは「カフェ・クワードリ」と言った。あとでフロリアンというカフェが有名なのだと聞いた。そこはいくら探しても見つからなかった。そのカフェでは私は、生オレンジ・ジュースを頼み、とてもおいしい。ワイフは、生トマト・ジュース、サンドイッチ=フォカッチャで、これにナッツがついた。ただし軽食としてはとんでもない高い値段だった。6000円くらいだった。生ジュースが高いのだろう。

広場に接する美術館をみて、その膨大さに驚く。ここはドゥカーレ宮殿と共通券で入れたのだった。コッレール博物館というらしい。モダン・アートの部を見てから、2,3階が博物館で、ヴェネチアの歴史的遺産の展示物も豊富である。14-18世紀のヴェネチア共和国時代の歴史と人々の暮らしの展示品である。膨大な宗教画の収集がある、途中で、ハプスブルクの邸がある。ヴェネチア共和国はナポレオンに屈服してからハプスブルクに支配されたのである。北一ガラス社長の浅原健蔵さんの推薦で見たのだが、それがなければ、見なかったかもしれない。

ここには国立マルチャーレ図書館もあり、この博物館から入れる。実際、サンマルコ寺院やドゥカーレ宮殿は大勢の人が見に行くが、ここは入場者が少ない。しかし前二者に劣らず重要だと、思う。

この美術館を出て、マルコ・ポーロの家を探したが、なかなか見つからない。ヴェネチアでは小路が入り組んでいてなかなか分かりにくいのだ。多くの人に聞いてやっと見つけたが、昔の彼の家はない。場所だけが明示されている。

近くにリアルト橋があるので、のぼって、ここから風景を見る。橋は賑わっていて、商店が出ている。リアルト橋の近くに魚市場があるというが、見逃してしまった。ヴァボレットで帰る。

宿の第二の推薦のレストランへ夕食に行く。そこは橋を渡り運河を越えて向こう側だった。開店より5分でも早いと入れない。開店は6時半からだった。私はワインとカット・ビーフステーキだった。ワイフはスパゲッティだ。イタリア語なのでメニュー表を見ても我々はなかなか決められないため、ボーイは半分怒ってしばらく注文を聞きに来なくなった。裏町という感じの通りだった。

このレストランを出てから、また運河を越えて戻り、ホテルの近くを散歩する。

街路の土産店でマスクーセットをワイフは買う。ヴェネチアでは仮面舞踏会が有名であり、その際、人々がつける仮面のミニチュアであり、マグネットがついている。その雑貨土産の売り子はバングラデシュ人で、若い男性だ、良い仕事があるから、来ると言う。バングラデシュの人は大勢が日本にゆき、東京に行っている、と言う。「日本はいい、日本人はいい」などと言っていた。そういえば、サンマルコ広場のウエーターもバングラデシュ人だった。バングラデシュは、人口と土地がほぼ日本と同じである。

近くでセルフ・サービスの食堂を偶然発見した。ここでコーヒーを飲む。面白そうなので、明日ここへ入ろうと考えた。

13日 ヴァボレットでアカデミア美術館へゆく。ここは宗教画が多い。ジョルジョーネ、ベッリーニ、ティチアーノ (c.1488-1576)、ティントレット (1518-94) の絵もある。ヴェネチ

ア派の一大コレクションだ。ジョルジョーネ (c.1478-1510) は ベッリーニに師事した。ジョヴァンニ・ベッリーニ (c.1430-1516) の代表作は、ここにある「ピエタ」である。美術館を出てから、近くのアカデミア橋から景色を見る。ここから見る大運河の景色が一番よいとされているからである。

その後、サンタ・マリア・デッラ・サルデーテ寺院へ行く。ヴェネチア第二の大きい教会で、ヴェネチア・パロック様式である。その前に運命の女神の像が立つ。100万本の木が杭として使われ、支えている。寺院の玄関に乞食が居たので写真を撮った。老女であり、参観者が入場料と間違えてお金を彼女に渡すのではないかと思う。

寺院の内部を参観する。聖具室があり、有料だが、入った。ティチアーノの名画がある。サルデーテとは英語でgood healthとなる。大体、ペスト祈願の教会がそういわれる。1629-30年にヴェネチアでペストがはやり、それをきっかけに建てられた。

ヴァポレットで帰ろうと思ったが、この付近には券売り場がなく、券が買えない。人に聞いたら、そういう場合は船内で買えるとのこと、安心した。

前日発見した近くのセルフサービスの店で、昼食をした。自由に取って食べる箇所もあり、サラダやチーズが盛られた大きな皿が並んでいる。私は、その皿からほんの少しすくってとったら、店の人に叱られた。一皿全部を買うのだった。イタリア人は食べる量が多いのだと感心した。私は、ワインと、野菜とモッツアレラ、そして揚げたポテト、ワイフはピッツアとタルトだ。

ヴァポレットで行き来する時、運河沿いの家々が見られる。とても美しいので、沢山写真を撮った。実際に邸内に入ると、大変な豪華な邸だそうで、写真集などを見ると、本当にそうだ。だから、有名な場所だけでなく、元貴族たちのこれらの邸を見て回る時間をとれば良かったと思う。

イタリアに行く前に、スリが多いと脅かされていた。我々は盗られなかった。

イタリアのホテルではどこでも、ジャムを押し出してとる器械がある。新鮮さを保つためらしい。朝、ホテルでたっぷりおいしいチーズが食べられる。パンもおいしい。各種の大きなハムがある。コーヒーや紅茶、変に甘いジュースがある。ヨーグルト、牛乳、ゆで卵、スクランブル・エッグがある。だがなぜか野菜がない。レストランでは、子牛肉、ポークがおいしい。

町で生ジュースはあまりないようだ。人々はコーラやファンタなど飲んでいる。イタリア人の食事の量は多いと思える。腰回りがびっくりするほど大きい女性に時々会う。

夕方は7時半まで明るい。イタリアの空はあくまでも青く高い。晴れの時は雲もなく、すばらしい。建物が石で出来ているせいか、豪華である。近隣や隣国に石切り場があつて可能だったのだろう。建物の内部の豪華さは、近世に驚くほどの富があつたことを示す。

イタリアでは、レストランとトラットリアがあり、後者は食堂という意味だと聞いた。食事の時の水だが、ミネラル・ウォーターに炭酸があるものとないものがある。レストランでは1リットルか500ミリリットルのものが売られていた。

ミラノもそうだったが、ヴェネチアでも、街中で落書きが多かった。ちょっとした余白のある壁にスプレーで書かれているのである。

今回は、ヴェネチアでの島めぐり、例えば、ガラスの島ムラーノ、トーマス・マンの小説、そして映画にもなった「ベニスに死す」の舞台になったリド島の見学を、ミスした。大体、ヴェネチアを3泊3日で見るとするのは無理である。

## ヴェネチアとフィレンツェの文化

ヴェネチアでは駅のそばに大きな駐車場があり、市民は自動車を持ち、田舎のヴィラ（＝邸）めぐりをするそうだ。

ヴェネチアは観光地なので物価は高いようだ。またこの時、ユーロは強かった（134円）ので、なおさら物価が高いと思えた。

こうしてヴェネチア・サンタルチア駅を15：25発で、フィレンツェへ向かった。

### (参考)

塩野七生『海の都の物語』5冊、新潮社。

マクニール『ヴェネチア』講談社

## フィレンツェ

フィレンツェとは、ローマ人が花の女神フローラにちなみ、フロレンティアと命名した。それ以来、フィレンツェと言われる。現在、トスカナ地方の州都である。

誤解を恐れずに言うと、ルネッサンスはフィレンツェで生まれた。推し進めたのはメディチ家である。その中でロレンツォ・ディ・メディチが最大である。

ルネッサンスは、キリスト教から見ると異教であるギリシャ、ローマ、ヘブライの文化を、キリスト教に付け加える運動である。

フィレンツェでは、ダンテ、マキアヴェリが活躍し、ボッカチオ、ガリレオを生んだ。

国家的なレベルで近代を作ったのは、オランダやイングランドだが、都市の規模で近代を作ったのは、ヴェネチアやフィレンツェである。両都は、ジェノアと並んで、市民の都市となった。これらの近代都市は自由にお金儲けができる体制である。これでこれらイタリア都市は発展したのだった。

フィレンツェでは12から13世紀に自治共和国を作った。封建貴族や豪族が政治家になるのを禁止した。そこで商人や銀行家が政権を担った。こうして近代都市になった。その中でメディチ家が権力を持った。同家は銀行業が主で、ヨーロッパ中に支店を持ち、ヨーロッパ全域の商業に携わり、大財閥になった。併せて政治権力も事実上握った。14世紀にここでルネッサンスが起きた。15世紀にフィレンツェはイタリア芸術のトップとなった。

レオナルドダ・ヴィンチ（1452-1519）は、フィレンツェのヴェロッキオの工房に入って学んだ。彼は1500-06年までフィレンツェにいた。だがその後、ミラノへ、そしてフランスへ去った。

ミケランジェロ・ブオナローティ（1475-1564）は、フィレンツェ生まれで、ロレンツォの庇護を受けた。1494年フィレンツェを去ってローマへ行った。

ラファエロ・サンティ（1483-1520）はフィレンツェをよく訪れ、1504年から長期間滞在した。しかしローマへ去った。

16世紀に、イタリア芸術が、ミラノ、ヴェネチア、ローマでトップとなるのは、これら3大芸術家がフィレンツェを去ったことにもある。

フィレンツェの最初の大芸術家は、マサッチオ（絵画）、ドナテルロ（彫刻家）、ブルネレスキ（建築）で、この3人以前はコシックだった。

フィリポ・ブルネレスキ（1377-1446）は、もともと彫刻家、金銀細工師で、遠近法を作った。1401年のコンクールにおちて建築家になった。40才ころから30年たらずの活躍で全ヨーロッパ的事業を行なった。

ドナテルロ（彫刻）は、ブルネレスキの友人である。パドワのガットトラータ騎馬像、フィレンツェの「マグダレーナの像」（サン・ジョヴァンニ礼拝堂）で有名で、近代的人間を表現した。

マサッチオ（1401-28）は、27歳で死んだ。カルミネ教会のプランカッチ礼拝堂「貢の銭」の人物画が有名で、この壁画を後年の画家は模範とした。天才マサッチオは古典主義的絵画といわれる。現実の、地上の人間を描いた。透視画法などを使った。

ブルネレスキやアルベルティ（建築家・理論家、万能人と言われた）は、ローマ古代建築を深く研究した。

ブルネレスキの遠近法、マサッチオの透視画法（遠近法）で、近代画の技法が誕生した。

これらの人々は本格的ルネサンスを準備した、初期ルネサンス芸術家である。

マルシリオ・フィチーノ（1433-1499）は、ルネサンスの人で、人間の発見をする。フマーヌスとは、人間的という意味だ。フィチーノは15世紀末のヨーロッパの名声を得る。彼が主催したフィレンツェのアカデミアにフィレンツェの文化人が集まった。場所はメディチ家である。老コジモが支援した。フィチーノは、古代ギリシャ思想と中世神学の統合を企てた。プラトン学者である。彼からルネサンスの学問が始まった。

フィレンツェで15世紀末に絵画が重要になる。

2013年9月13日 列車ユーロスターでヴェネチア・サンタルチア駅を出て、フィレンツェのサンタ・マリア・ノヴェッラ駅に着いた。本来2時間ほどで着くのだが、珍しいことに列車は1時間遅れた。途中、隣に日本人姉妹OLが乗っている。旅慣れているらしい。フィレンツェのホテル、アルバ・パレスに泊ることになる。3星ホテルである。駅にとっても近いが、もっと市の中心の方が便利でよかったと思う。だがここはフロントが親切だった。多分昔の富豪の家を改造したようだ。

すぐ、スーパー・マーケットへ行く。ヴェネチアでは見なかったので、イタリアではスーパー・マーケットがどんな風なのか見たかった。ここの買い物籠はかなり便利に作られている。ワイフはチョコや水などを買う。チョコレートはスイス製らしかった。ただイタリアで売る、とある。チョコレートはスイスとベルギーが有名である。食料、ワインなどを買って、部屋で夕食にする。

14日 フィレンツェはメディチ家の影響が強い。ウフィーツイ美術館へ行く。ここを見るためにフィレンツェへ来たようなものである。ここもメディチ家の邸であった。前の夜、思いついてホテルで予約を取ってもらっていた。11時45分で予約したので、向かった。

だが早かったので、近くのヴェッキオ橋を見に行く。この橋はアルノ川にかかっている。橋の上は宝石店でいっぱいだ。お金持ちが買いに来るのだろうか。それら商店の上にまだ2階があって、そこは住居らしい。昔は廊下だったはずだが。そしてメディチ家の人々は政治的危機の時、ここを通過して逃れることも出来た。橋の中央には少しだけ商店がないところがあるので、展望がきく。ここからアルノ河を眺めた。この橋は、若いガリレオが飛び込み自殺をしようかと思ったところだ。

橋の端の店でアイス・ジェラートを食べる。ヨーロッパのジェラートは味が濃くて美味しい。

ここのトイレに入ると、すごく深い地下にあって、その階段が急傾斜で、一気に地下二階まで降りる。黒人女性がウエトレスとして働いている。

ギャラリー・ウフィーツイというのが正確な名だが、そこは素晴らしい美術館だ。メディチ家のコジモ1世の依頼でヴァザーリが建築を担当し、1560年に着工された。ヴァザーリ(1511-1574)は、マニエリスム期の画家・建築家である。『画家・彫刻家・建築家列伝』(初版1550)で有名である。そして芸術品はメディチ家が集めたものである。ポッティチェリの「プリマヴェーラ」(春)、「ヴィーナスの誕生」がある。後者はルネッサンス絵画の画期となった。ダ・ヴィンチの「受胎告知」、ラファエロ「ヒワの聖母」、ミケランジェロ「聖家族」(c.1507)、ラファエロ「レオ10世の肖像」(c.1512)、カラヴァッジョの作、がある。これら絵画史上の名作の本物を見られるというのは感動的である。三大天才画家(ラファエロ、ダヴィンチ、ミケランジェロ)と違って、ポッティチェリは、生涯フィレンツェで暮した。ポッティチェリについては辻邦夫の小説『春の戴冠』4部作がある。ここを日本の観光旅行団が足早に通り過ぎていった。

見終わってくたびれたので、館内のテラスでコーヒーを飲む。メニューに書いてある値段と違うので、理由を聞いたが、よく分からない。ここから鐘楼が見える。ジョット(1267?-1337)設計の鐘楼である。ジョットはフィレンツェで活躍し、ギリシャ・ローマの現実感ある絵画を目指した。

アカデミア美術館(ガレリア・デル・アカデミア)へ行ってみると、観光客で大変な行列であった。そこで他の日にしようと考えた。それが何と、見る機会を逸してしまうのだった。ここにはミケランジェロの「ダヴィデ」像がある。

夕方、看板が出ているので、ホテルの近くのレストランで、ワインと、T・ボーンビーフつまり骨付きビーフステーキ、を食べる。こんがりやけている。そして一人では食べられないのではないかと思うほど大きい。これは、フィレンツェの名物だったことが後から分かった。ワイフはスパゲッティ・ナポリタンとサラダのセットだ。

15日 ホテルでタクシーを予約してもらって、ミケランジェロ広場へ行く。料金は18ユーロくらいだった。運転手は若く、携帯片手に運転しっぱなしである。ヴェッキオ橋は渡らずに他の橋を渡り、アルノ川をこえて急坂を登る。途中に宮殿がある。ついた広場は高い丘の上にあり、ミケランジェロ像が立っている。ここには観光客が大勢いた。ここから眺めるフィレンツェの景観がよく、広く見渡せる。

結婚式を挙げるために来る人々が2組いた。日本人とアメリカ人らしいカップルの2組であった。許しを得てアメリカ人と思える夫婦を写真に撮った。新婦は白いウェディング・ドレスを着ている。写真を撮る時、新婦はうれしそうだった。「コングラチュレイションズ」と言ったら、「グラチエ」(ありがとう)と返事をされたので、イタリア人だったのかと思う。新夫は身体障害者だった。その後、丘を歩いておりて、川岸を散歩する。ここには多くの貴族の館が並ぶ。楽しい散歩道であった。

さて、この丘の名となったミケランジェロ(1475-1564)は3大天才の一人で、フィレンツェ共和国生まれである。「ピエタ」(1498-1500年製作、ローマのサンピエトロ寺院にある)で有名になった。「ダヴィデ像」(1501-4年製作)をフィレンツェの大聖堂のために作った。最初はパラッツォ(宮殿)・ヴェッキオ(ルネッサンス様式)の前にあったが、その後、アカデミア美術館に移った。

その後 我々はピッティ宮殿へ向かう。これは15世紀にピッティ(メディチ家)が建て、メディチ家のコジモ1世が大改築した。しかし開館時間が終わっていたので、外側だけ見た。巨大なものだ。宮殿の前に座って街路を眺める。後に聞くと、ここは素晴らしい室内がある宮殿だったそうだ。

案内ちらしで示されたトラットリア(食堂)で食事をする。ここは7時から開くから時間を少しつぶした。私はワインとビーフ・シチュー。このビーフがとてもやわらかい。ワイフは豆の煮込みかゆだった。これはフィレンツェ名物だったと、後で知った。客は中国人家族やアメリカ人グループなどで、店はすぐ一杯になった。評判がよいのだろう。

16日 午前、ホテルの近くの店から日本へ荷物を送った。民間の業者が近くに店を出していたのだった。買った本や使った衣類がかなり重くなったからである。重さは8kgで、送料は120ユーロくらい。船便でと言ったのだが、船便はないと言われ、だからこれは航空便料である。後日、日本に戻ってこれを受け取ったのだが、何と日本の税関から数千円の税金が要求されたのには痛かった。

ちなみに、フィレンツェでも乞食が居た。道路にうずくまっていた。

駅近くの、つまり我々のホテルに近い、サンタ・マリア・デル・ノヴェラ教会(ルネサンス様式)を、ワイフだけ見て、感嘆していた。私はくたびれているので、教会の前の公園で休んでいた。ところがそれが大変立派なすばらしい教会だったのだそうである。大体入場料をとるようなのだから、当然かもしれない。ヨーロッパでは普通は教会は拝観料をとらないものだ。

中央市場へ行く。あらゆる商品が並んでいる。といっても食料品が多い。そこで、日本人の売り子合計3人にあった。それぞれ理由があって働いている。大体、扱う商品を学ぶというケースが多く、単に働きにきているのではない。パスタの店を開きたいという女性もいた。この市場で食用うさぎを売っているのを見た。ヨーロッパでは動物は何でも食べる。ウィーン留学時代に私は、うさぎを食べたが、鳥と豚の中間の味である。

メディチ・リカルディ宮殿(ルネサンス様式)をみる。ここは本来イのメディチ家の邸である。巨大な石作りで豪華である。メディチ家の老コジモがメディチ一族の住居として1444年に建設した。プリンチピ礼拝堂と言われるメディチ家礼拝堂に、ゴッツオーリの「東方三博士の礼拝」がある。ここは入ってみた。ここだけで監視人がいる。このリカルディ宮は17世紀に改築された。

ここで美しい絵を描く画家の展示会があったので、見る。画家本人がおられたので、いろいろ話をしていたら、展示小冊子をいただいた。A・コルシさんという。住所を教えて貰って、日本から手紙を出したら、自筆の美しいカードの絵を送っていただいた。そこで大切に壁に貼っておくことにした。

ある日、昼食で簡単な食事の店に入った。軽いセットものを注文した。そこはトイレがあって、お客ではない人に利用されないために、店員がトイレの鍵をもって開け閉めしていた。ここでスパゲッティを食べたのだが、イタリアのスパゲッティは、いわゆるアルデンテが多く、しかし硬めであって、日本のとは違う、というワイフの感想である。そういうわけで、日本のスパゲッティとイタリアのスパゲッティは違うもので、私は日本の方が口に合う。

もう1度スーパー・マーケットへ行った。ティッシュや水などはいつも必要になるからだ。そしてホテルで休む。なにしろ歩き回るので、くたびれるのである。アカデミア美術館を明日見学

## ヴェネチアとフィレンツェの文化

したいとの予約をしたが、とれた時間が合わず、行けないことが翌日わかることになる。

高級ホテルで食事をしようとして、雨が降っているのに、ネクタイまでして出かけた。イタリアで貧乏旅行ばかりしていたが、1度くらいは素晴らしい食事をしてみようというわけだった。だが、日本のように高級ホテルに高級レストランがあるわけではないらしい。近くの高級ホテルに入ったら、そういうものはないらしい。そこでやむなく夕食を近くのレストランでとることになった。そこは夕方だけ開くのだった。私はワインとミックス・グリル・ミート。ワイフはラザニアだ。こうして立派な経験ができなかった。ちなみにイタリアのレストランではワインは皆おいしかった。

17日 ガリレオ博物館 (ムセオ・ガリレオ) があると知ったので、是非行かねばならないと思っ  
て行ったが、あまりガリレオには関係がなかった。小さな科学博物館だった。

ヴェッキオ宮殿 (現、市庁舎) (ルネサンス様式) を見る。これも大きなものであり、メディチ家の邸であって、その後、庁舎になった。ウフィツィ美術館とは隣接している。

ウフィツィ美術館とヴェッキオ橋の間の通路に、黒人の外国人たちがコピー絵を売っている。これで商売になるのかな、と思うのだが。

フィレンツェのハイライトの1つドウオモ (大聖堂) を見学する。ドウオモ・サンタ・マリア・デル・フィオーレ (ルネサンス様式) だ。ドウオモはカテドラルのことだ。ロレンツォ・ディ・メディチが暗殺を逃れて隠れたのはどこだか分からなかった。後日、正面祭壇の左手の階段室だと分かった。大聖堂は司教座のある都市に作る。ドウオモに「最後の審判」(ダ・ヴィンチではない) がある。最後の審判はカトリックにとって最も重要な絵である。ドーム (大円蓋) (ルネサンス様式) はブルネレスキの設計で、他の部分は彼以前にすでにできあがっていた。ここでサヴォナローラが演説していたのだな、と思うと感慨深い。

シニョーリア広場にヴェッキオ宮殿の正面とウフィツィ美術館の裏手とが面している。ちなみに、ここでサヴォナローラが焚刑にあったのだ。我々は、計画がきちんとしていなかったの  
で、同じ所を何回も歩いてしまった。フィレンツェはヴェネチアと違って平坦な町なので、歩くのは楽である。共和国広場を歩いていたら、日本人の集団に出あった。中の一人に聞いたら、短大生で研修旅行に来た、と言っていた。

シニョーリア広場に面した野外のレストランで、私はフルーツと、ワイフは菓子を食べる。これがカノーロ・シシリアニといい、この菓子はおいしいと、老ウエイトレスはしきりに推薦し、ワイフもそう言う。

この広場で、お土産物の屋台が出ており、私はガリレオの胸像を買った。売り手の中年男性が、「アストロノーム (天文学者) だよ」といい、私は「フェイマス (有名) な、ね」と応ずる。ガリレオ・ガリレイはフィレンツェ育ちで、ヴェネチア支配下のパドワ大学で長く教え、その後、再びフィレンツェへ戻った人である。ガリレオについては、日本では新書モノで簡単な伝記などがあり、詳しい研究書も多く翻訳されている。私の読んだ1つは、ハーサニイ『星を見る人』上下、全600ページくらいのもの。あと、『新科学対話』や『天文対話』も読んだことがある。

フィレンツェのサン・ロレンツォ教会は必見で、内部がミケランジェロの彫刻だと。ブルネレスキが設計したと。隣接して図書館があり、その階段はミケランジェロの設計だと。これ以降マニエリスムが出た。

4泊ではフィレンツェを見切れない。多くの名所を逸した。それに貴族の館のうちで入館出来るところは入っておきたかった。というわけで、ヴェネチアとフィレンツェはあともう2泊余計に居た方がよかった、と反省する。といっても、きりがないだろう。日本に帰ってから知人に、ヴェネチアとフィレンツェの旅行に行ってきましたよ、と言うと、それら2つは観光地であって、他にシエナのような、その位の素晴らしい町が沢山ありますよ、とのことであった。私はイタリア旅行については素人だな、と思う。

列車を待つためにホテルで時間をすごした。我々は、フィレンツェのサンタ・マリア・ノヴェッラ駅を発って、ローマ・テルミニ駅へ向かった。

ヴェネチア、フィレンツェ、ジェノヴァなど、イタリアは商人による近代共和制都市国家を作った。これにより近正文化が誕生した。

(参考)

マッシモ・ウインスピア『メディチ』Sillaba 2000年。

高階秀爾『フィレンツェ』中公新書

ブルクハルト「イタリア・ルネサンスの文化」

モンタネッリ、ジェルヴァーゾ「イタリア・ルネサンスの歴史」上下、中公文庫

マキアヴェリ「フィレンツェ史」上下 岩波文庫

『メディチ家』講談社

全体として、『イタリア史』山川出版